氏　　名	久葉　智代
学位(専攻分野)	博士(学術)
学 位 記 番 号	総研大甲第 2382 号
学位授与の日付	2023 年 3 月 24 日
学位授与の要件	文化科学研究科　国際日本研究専攻 学位規則第6条第1項該当
学 位 論 文 題 目	日本古代における空間認識
論 文 審 査 委 員	主　査　　荒木　浩 国際日本研究専攻　教授 榎本　渉 国際日本研究専攻　准教授 倉本　一宏 国際日本研究専攻　教授 仁藤　智子 国士舘大学　文学部　教授 吉川　真司 京都大学　大学院文学研究科　教授

（様式３）

博士論文の要旨

氏　　名　久葉　智代

論文題目　日本古代における空間認識

本論文は、日本古代、主に奈良時代から平安時代にかけての空間認識の方法と、その表現の様相について考察するものである。

「序章―日中都城空間比較論―」では、本論文の前提として、古代の空間の中心である唐の長安と日本の平城京・平安京のそれぞれの構造と、文学に表された空間との関わりについて論じた。**「第一部　奈良時代における空間認識」**では、奈良時代の人々の空間認識がどのようなものであったかを、中央と地方の関係や、それに付随する境界に着目して論じた。**「第二部　平安京をめぐる空間認識」**では、平安時代の平安京を論点の中心に据え、貴族の移動や、「みやこ」「ゐなか」の概念から見た平安京を取り巻く空間の様相について論じた。**「終章―国土と空間認識―」**では、流刑地の設定や境界の概念を通して、古代において日本の国土の範囲がどのように捉えられていたのかを論じた。

以下、各章の要旨を具体的に示す。

「序章―日中都城空間比較論―」では、長安と、それに倣って造営された平城京と平安京について、各都城の構造と、それに関連する文学作品を通じて、都城という空間がどのように形成されていたのかを概観した。古代における文学作品の担い手は都城に住む人々であり、都城の構造が文学作品の舞台の選択にも影響を与えていたことが明らかになった。

第一部第一章「『万葉集』にみる「みやこ」と「ひな」への意識」では、『万葉集』中の「みやこ」と「ひな」という語を中心に、それに関係する「ゐなか」や「ふるさと」も含め、歴史的な背景や歌の場という観点からそれらの語が持つ具体的な姿を明らかにした。「みやこ」という語は都城の変遷に伴って天皇の居所から官人の生活空間を指すようになり、それは畿内よりも重視された。官人たちにとって、「みやこ」に対するものとしての「ひな」は、「ゐなか」や「ふるさと」とも異なる異質な場所であった。

第一部第二章「八世紀における境界認識―大和国を中心に―」では、八世紀における大和国周辺のどのような場所が境界とされていたのか、そしてその境界がどのように認識されていたのかを自然と人工の両面から検討した。当時は山や川が境界として認識されていたが、ある地点を境界として認識するということは、自らが交通路を利用して移動する際の状況を投影したものであった。また、境界に囲まれた空間の把握についても、明確な領域の意識があったのではなく、自身の経験と認知によるものであった。

第二部第一章「『小右記』にみる貴族の移動と平安京」では、藤原実資の日記である『小右記』を史料として、そこに見られる貴族の移動や平安京周辺の地名に関する記事を中心に分析した。平安京の周辺には、固有名詞で記される寺院や山庄のほかに、「北山」「東山」などの漠然とした地名で呼ばれる面的なエリアが京を取り囲むように広がっていた。それは、平安京に住む貴族が、京外に出る機会が少ないことに起因する。そうしたエリアは、貴族にとって平安京内にはないものを補完するための場所であった。

第二部第二章「平安貴族と「ゐなか」」では、平安時代の文学作品に見られる「ゐなか」の語に着目し、平安京の貴族にとってどのようなものであったのかを考察した。「ゐなか」は、『伊勢物語』から『源氏物語』にかけて用例が増加すると同時に、それが指す範囲も、平安京周辺から、平安京を遠く離れた場所まで、広い範囲へと変化していった。その背景には、平安京が日本列島の中心として強い力を持ち、「ゐなか」を意識する主体である貴族が京外との関わりを持たなくなったことが背景にあった。

補論「平安時代における「ゐなか」と「ひな」」では、「ゐなか」に類似すると考えられる「ひな」という語と、平安京との関わりを考察した。そのことによって「ゐなか」と「ひな」の境目は曖昧になり、結果的に「ゐなか」が拡大した。また、作品に描かれる「ゐなか」も虚構のものとなっていった。「ゐなか」が虚構となっていく背景には、平安時代の文学が『万葉集』と異なり、平安京に住む貴族たちが、平安京の中で多くの作品を生み出すようになったことが考えられる。

「終章―国土と空間認識―」では、まず古代の流刑地の形成を、空間認識という観点で捉えた。流刑地は、それぞれが日本列島の中で、境界性を帯びた場所であった。それを踏まえて、境界から見た日本列島という空間について考えると、まず境界は東西南北の四方向で表される。そしてその境界は時代によって変化し、それにともなって日本列島の範囲の捉え方も異なることが明らかになった。

以上から、次のような結論が得られた。古代の空間認識は、「みやこ」、つまり都城の存在を無視して考えることはできない。現在我々が目にすることのできる古代の史料は、日本列島の中心であった都城に住んでいた人々の手になるものだからである。場所や構造など、都城の変化に伴って、それを取り巻く空間も変化する。まず、藤原京に始まる都城ができたことによって、官人がそこに集住し、共通認識としての「みやこ」ができる。藤原京ではまだそれほど確立していなかった「みやこ」への意識は、平城京に遷都してからは強固なものとなった。そして、平安京へ遷都し、長く「みやこ」として存在することで、強い求心力を持った。空間認識は、人の移動と密接に結びついている。中央から地方への移動が増えると、同時に「ひな」という外の空間への認識が生まれた。そしてその途上にある地形を境界として認識する。反対に、平安時代に「みやこ」の外へ出ることが減ると、外の世界に対する認識も変質していく。

また、空間認識の範囲は、認識する主体が行動する範囲に影響される。第一部第二章では、交通路と境界が密接に関係することを述べた。第二部第一章では、貴族の移動の機会の少なさが、平安京の周辺部を漠然と捉える認識に結びついていたことを明らかにした。終章で述べた支配領域の変化による境界の変化も、中央が、支配が及んでいると認識し、国司などを配する場所が拡大することで起こるものであり、大きな意味では同様のことである。このように、古代の人々が認識する空間とは、自身の行動範囲を投影したものであった。自身の行動と結びついた空間は、明瞭に認識される。空間認識とは、基本的には非常に主観的なものの集合体である。

本論文は、古代における空間認識の様相を、歴史学にとどまらず、文学・考古学・地理学などの成果を参照しながら明らかにしたものである。考察の結果、以下の三点については今後の課題となることが浮き彫りになった。一点目は、空間認識や境界認識に関する、都城以外の個別の地方についての研究である。二点目は、周辺諸国との関係における、日

本列島の領域の問題である。三点目は、後の時代の空間認識との比較である。

Form8・Separate Sheet
（様式８・別紙１）

Results of the doctoral thesis defense

博士論文審査結果

Name in Full
氏 名　　久葉　智代

Title
論文題目　　日本古代における空間認識

本論文は、日本古代における空間認識について、飛鳥時代から平安時代にわたる様々な史料を使用することによって解明しようとしたものである。とりわけ都から見た地方・辺境に対する認識に焦点を当てていることが、その考察の特徴となっている。

論文は二部で構成され、それに「問題の所在」および序章と、終章および「結語に代えて」が付随している。

序章「日中都城空間比較論」では、唐の長安と日本の平城京・平安京との比較を、『白氏文集』をはじめとする唐の漢詩、日本の『万葉集』『古今和歌集』『土左日記』や平安私家集といった多様な文学作品の比較から試み、都城の構造が文学作品の舞台の選択に影響を与えたことを明らかにして、本論文の視界を拓いている。

第一部「奈良時代における空間認識」では、奈良時代における空間認識を、中央と地方の関係や境界に着目して考察している。

第一章「『万葉集』にみる「みやこ」と「ひな」への意識」では、『万葉集』に見える「みやこ」と「ひな」という語を精細に分析している。「みやこ」をめぐる中央観を論じて「ひな」に対する意識の特殊性を指摘し、「ひな」は「ゐなか」や「ふるさと」とは異なる異質な場所であったことを明らかにしている。

第二章「八世紀における境界認識―大和国を中心に―」では、「境界」という概念に着目し、大和国周辺の四方面における境界認識を分析する。当時の交通の実態にも留意しつつ、大和国周辺の境界に囲まれた空間は、明確な領域の意識があったのではなく、人々の経験と認知の重層によるものであったという空間認識を描き出している。

第二部「平安京をめぐる空間認識」では、平安京をめぐる空間認識を、貴族の移動や、「みやこ」「ゐなか」の概念から見た空間の様相を通じて考察している。

第一章「『小右記』にみる貴族の移動と平安京」では、藤原実資の『小右記』に見える平安貴族の移動や、平安京周辺の四方面における地名をめぐる描写の特色を分析し、平安京周辺の「北山」「東山」などの面的なエリアが、貴族にとって平安京内にはないものを補完するための場所であったことを論じている。

第二章「平安貴族と「ゐなか」」では、『伊勢物語』『うつほ物語』『源氏物語』『今昔物語集』などの平安文学に多用されるようになった「ゐなか」という語が、平安貴族にとってどのような意味を持ったものであったかを、時代の変遷とともに分析している。特に『源氏物語』では用例の増加と同時に、それが指す範囲も、平安京周辺から、平安京を遠く離れた場所まで拡大したことを明らかにしている。

また補論「平安時代における「ゐなか」と「ひな」」では、平安文学に見える「ゐなか」と「ひな」の差異を分析し、その平安京との関わりを考察している。たとえば『伊勢物語』においては保たれていた「ゐなか」と「ひな」の境目は曖昧になり、特に『源氏物語』において「ゐなか」が拡大して「ひな」の意味領域を覆うと分析して、京外への関心が薄れていった平安貴族の空間意識を論じている。

終章「国土と空間認識」では視点を広げ、古代の流刑地からみた空間認識の変遷を分析し、ついで日本の国土空間の問題として、境界の表現方法、周縁の変遷を考察してい

る。

これらの考察の結果、古代の日本列島の中心であった「みやこ」すなわち都城の場所や構造などの変化に伴って、それを取り巻く空間認識も変化し、平安京が長く「みやこ」として存在することで、大きな求心力を持つにいたったことを明らかにしている。

以上、本論文は、重要な意義を有するにもかかわらず、依然、解明すべき多くの研究課題を内在する「空間認識」というテーマについて、多くの新見解を導いている。

本論文の意義としては、まずは文学作品と古記録という、性格の異なる史料を共に分析するという考察の手法を駆使していることが挙げられよう。歴史と文学の双方に、幅広くまた丁寧な読解を行うことは、歴史学の面からも、また文学研究の観点からも、なかなか困難な作業であるが、本論文では、それを着実に遂行している。

また、都城から見た空間認識という切り口を、飛鳥時代から平安時代という五百年にもわたる長いスパンで考察することで、日本古代の認識の変遷を鮮やかに浮かび上がらせていることも、特筆に値しよう。とかく個別のテーマや焦点化した対象の分析に終始しがちな日本史研究や文学研究において、両分野を俯瞰しつつ、こうしたスケールの大きさを持って研究を行ない、博士論文を構想することは、その試みにおいて、重要な研究姿勢であると評価すべきであろう。

さらには、この論文が、都城論・空間論・辺境論・境界論といった様々なテーマに隣接し、または内包している点も、重要な点である。申請者が本論文を基礎として、将来、研究者としてその才能を発展させる可能性を、十分に期待させるものである。

このように、本論文は多くの成果を得たものであるが、まだ不十分な点も認められる。たとえば引用した各史料それぞれの背景についての厳密な考察について、より多角的な分析を要するものと思われる。とりわけ文学作品の語彙の追跡については、本論文では、時間の制約もあってか、より厳密で体系的な語史分析と資料批判が求められるべきところも見える。また、東アジアにおける各国の都城との比較は、文学作品について触れられてはいるものの、本格的な考察にいたっていないのは、いささか残念に思われる。流刑地の分析にもおよぶ国家や空間認識の研究には、より制度論的な視点と精細な解析も求められる。

さらには、日本古代における空間認識に関する総合的な結論について、より踏み込んだ見通しを示して欲しかった。論を構築する前提として、より俯瞰的で精緻な研究史叙述も必要だろう。

ただし、これらの課題は、むしろ申請者の今後の研究の発展における明確な方向性を示すものでもあり、本論文が、日本古代の空間認識に関する研究に画期的な飛躍をもたらす考察であることは十分に評価できると考えられる。

なお、申請者は、２０２３年１月９日に実施された学位論文公開発表会において、多くの質問に対して明確・適切に回答し、それを学術的議論の場で的確に展開する能力を十分に示した。申請者は研究者としての資質を充分に備えており、その学力は博士の学位に相応しいものであると判断される。

以上の諸点から、審査委員会一同は、全員一致で本論文を学位授与に相当するものと判定する。